
ユウ 1 探偵長事件簿～ファイル001・平成刀語～

青い三角定規

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユウ1探偵長事件簿〜ファイル001・平成刀語〜

【Nコード】

N1183Z

【作者名】

青い三角定規

【あらすじ】

少年探偵・山藤悠一の元に舞い込んだ依頼。それは、人気小説家・鑓次郎からのSOSであった！

平和な現代の日本を舞台に、今再び奇策士と無刀の剣士の旅が始まったのだ…。

第一話 小説家・鍵次郎（前書き）

初めまして。青い三角定規です。この作品についているユウ1探偵長というのは私が描いている漫画の主人公です。どんな人物か？それは後々わかって来ます。

第一話 小説家・鑓次郎

ある暖かい日の事だった。県立甲南高校の三年生・鑓次郎はいつもの様に授業を聴かずに居眠りをしていた。

「鑓…鑓！」

教師は眉毛を10時10分にして詰め寄った。

「はひっ？」

「この後に及んで言い訳もあるまい」

「バシッ！！！！！！！！」

教師は出席簿で次郎を叩いた。

「いてっ！」

次郎の頭には野球ボールぐらいのコブが出来た。

「鑓…貴様留年したいのか！？あん！？」

「いやはや、なんとも…」

教師の鬼のような形相に次郎は冷や汗タラタラである。

と、何処からともなくバタバタと走る音が近づいてきた。

「た、大変だ！」

そう言つて入ってきたのは教頭だった。

「ど、どうしました教頭先生！」

「みんな、聞いてくれ。鑓が、鑓が芥川賞の最終候補に入った！」

「な…！」

教師は出席簿を床に落とした。

「俺が…。俺が芥川賞！？」

「バタン！」

「や、鑓！」

次郎はあまりの事に失神してしまった。

数ヶ月後、マスコミは次郎の芥川賞最年少受賞を大々的に報道したのだった。

第一話 小説家・鎌次郎（後書き）

今回は次郎サイドだったので、次回はユウ1探偵長にスポットを当てたいと思います。

第二話・少年名探偵（前書き）

お久しぶりです。テストがあつてしばらく書けませんでした。お約束どおりユウ一探偵長サイドです。果たして彼は何者なのか…？

第二話・少年名探偵

ここは東京都・麹町…。

深夜1時をまわった頃、静かなビル街に非常ベルが鳴り響いた。

「いたぞ！あいつだ！」

大東銀行・麹町支店のビルからガードマンが二人、月の方角へと走って行った。彼らの追う先にはパンパンになったバッグを両手に持った男たちがいた。

「くそつ、予定が狂っちゃった！」

「心配するな。もう二分もすれば迎えの車が…！ほうら、来たぞ！」
一人の男が全速力で向かってくる一台の自動車を指差した。

キーンッ！！

自動車は激しいスリップ音をたてて止まった。

「おい！早く乗れ！」

「了解！」

そう言うやいなや、男たちは自動車に飛び乗った。

「ふう、助かった…」

「早いとこずらかろうぜ」

と、安心も束の間。遠くからパトカーのサイレンが近づいてきた。

「くそつ、通報されたか！おい、マシンガンだ！」

一人の男が機関銃を片手に窓から身を乗り出した。

「これでも喰らえ！」

男は引き金を引いた。

そのあとの凄まじい事火の如く。視界を失ったパトカー軍団は大ク
ラッシュを起こした。

「ハハハ…。矢でも鉄砲でも持ってこい！」

捨て台詞を吐いて、男たちは闇の中に消えてしまった。

10分くらい経った頃、男たちは辺りに車が一台もない事に気づいた。

「おい、気味悪いな。」

「ば、馬鹿野郎！夜だから仕方ないだろ！」

と、その時。男たちの視界に一台の黒い自動車が入って来た。かなり古い型のクラウンらしい。

「ふっ、ただのボロ車か……」

そう言つて男たちは通り過ぎようとした。と、その時

……プシューッ！

スプレーのような音が響いた。

「なんだ？」

男たちが振り向いた次の瞬間

ドガン！

爆音をたてて自分達の車が火を吹いた。

「が、ガソリントankが燃えている！？」

燃えているだけならまだいい。じきにガソリンが爆発してしまうはずだ。

「は、早く逃げろ！」

男たちは一斉に車から飛び出した。

車はそのまま直進し、大爆発を起こした。

「あの車の奴が撃つたのか！？」

男たちは背後から迫る自動車を睨んだ。

（銃に詳しい人物はもうお分かりだろう。先ほどのプシューッという音はサイレンサー付きのピストルの発射音だったのだ。）

睨む男たちの前で、自動車はゆっくりと止まった。ドアが開き、中からコート姿の人物が現れた。

「あっ！き、貴様は……」

一人の男がコート姿の人物を指差した。

「少年探偵のユウ！探偵長……！！」

ユウ1探偵長と呼ばれた少年はゆつくりと男たちに近付いた。
「ジタバタしても駄目だぜ。警官隊がこっちに向かっている。おとなしく捕まりたまえ。」

探偵長の言葉通り、パトカーのサイレンが近づいてきた。

「うむむ…。もはやこれまでか！」

一人の男が探偵長に拳銃を向けた。

ババババーン！！…。

…カタン…！

アスファルトの上に拳銃が転がった。

「だから、無駄な事はやめろと言ったんだ。」

そう言っただけで探偵長は拳銃をポケットにしまった。

パトカーが着き、中から現れた警官達によって男たちは連行されて行った。

「探偵長！ツ！無事ですかーッ！」

そう言っただけで、一台のパトカーから詰め襟の学生服姿の少年が降りてきた。

「やあ、猫目か。このとおり、ピンピンしているよ」そう言っただけで探偵長は胸を叩いた。

「いやあ、無事で良かった良かった。」

「猫目、まさかおまえ俺の亡きあとに副探偵長から探偵長になる気だったんじゃないね。」

ニヤニヤと笑う探偵長に猫目はぶちギレた。

「た、探偵長！！馬鹿な事言わんで下さい！」

「ハハハ、悪かったよ。さて、あとは警察に任せて社に戻るとしよう。」

そう言っただけで、探偵長は猫目と共に愛車に乗り込んだ。

さて、読者の皆さん。

皆さんにそろそろユウ1探偵長が何者なのかを説明せねばならない。彼は全国に94もの支社を持つ探偵会社・さつき探偵社の社長、す

なわち探偵長なのだ。

そして先ほどから彼と共にいる詰め襟の少年は副探偵長の猫目大作少年である。

彼ら、さつき探偵社の手によって日本の平和が守られていると言っても過言ではない。

第二話・少年名探偵（後書き）

彼は少年探偵でした。

さて、次回、次郎サイドで進展が…！？

第三話・新しい小説（前書き）

前回から大部間が開いてしまいました。今回、この作品の鍵となる小説が登場します。まさか、これが事件の幕開けになるとは…。

第三話・新しい小説

チュンチュン、チチチ…

雀の鳴き声で次郎は眼を覚ました。

「フアア…。今日も徹夜だったな…。」

そう言つて、次郎は机の棚から煙草の箱を取り出し、火を点けた。火がついた煙草はゆらゆらと白煙を立てながら灰になっていった。朝日の射す四畳半の和室は煙まみれになった。

彼が最年少で芥川賞を受賞してから数年の時が経った。今では次郎は新聞小説、週刊・月刊誌の連載小説、漫画原作と様々な方面で多忙な生活を送っていた。

「さて、そろそろ編集さんを起こして来るかな…」

そう言つて次郎は部屋のふすまをあけて、隣の部屋へ向かった。

「起きて下さい、皆さん」

そう言つて、次郎は部屋の中で寝ていたスーツ姿の五人に声をかけた。

「あ、先生…。おはようございます。」

一人の丸刈り頭の編集者が鑢に挨拶をした。

「はい、原稿。早く行かないと編集長がこれだぜ?」

次郎は両手の人差し指を立て、鬼の真似をした。

「入稿ありがとうございます！急げっ！」

そう言つて編集者はスタコラと編集部に歸つて行つた。そんなやり取りを四人分繰り返した後、次郎は新聞を取りに外へと出た。

「あれ？新聞がない。」

いつもならば四つ折りになつて入っているはずの新聞が今日に限つて見当たらない。

「新聞なら休みだぜ。」

と言つて、次郎の背後から袴姿の男が現れた。

「兄貴！随分早いな。」

「バカ、武道家が遅くまで寝ていてどうする。」

「ハハハ、ごもつとも。」

そう言つて次郎は頭を掻いた。

「しかし、世の中は何があるかわからんなあ。まさかお前がプロの小説家になるなんて、考えもしなかったよ。」

「まあ、そりやそうだろうな……。」

「次郎、そつえば今日は小説サロンの編集者さんが来る日じゃなかったか？」「あ、そついや今日だったな。すっかり忘れてた。」

「馬鹿！！小説家がそんなでどうする！！」

一郎にたしなめられ、次郎はしよげた顔を見せた。

「兄貴、段々死んだ親父に似てきたな。」

「ハハハ、そうかもな……」そう言つて一郎は玄關に掲げてある看板をさすつた。

「虚刀流拳法道場」

「剣道から派生した拳法・虚刀流…。なんか不思議だよな、剣道から派生したなんて。」

そう言つて一郎は大きな伸びをした。

確かに。と、次郎は思った。剣道から派生したなら何かしらの武器を使うはずである。しかし虚刀流に限つてそれがないのだ。

「次郎、次郎…？」

「うん！？」

考えに夢中で意識がとんでいたらしく、次郎はやつと我にかへつた。

「全く、立つたまま寝てたのか？」

「まさか…。」

一郎に茶化された照れ隠しに、次郎は頭を掻いた。

「えつと、確か編集さんが来るのは午後だったな…」「な、なんで兄貴が知ってるの！？」

「さあね、忘れっぽい弟がいるからじゃないの！？」

「ごもつとも…。」次郎は兄に一本取られた事を悔しく思っているらしく、頻りに煙草を噛んでいる。

と、家の中から二人を呼ぶ声がした。

「あなたー、次郎さん、朝御飯の支度が出来てますよーっ。」

「わかった、今いく！」

「今いきまーす！」

そう言つて二人は居間へ向かつて走りだした。

二人を呼んだのは一郎の妻の鑓和江である。古典的な日本女性といった性格で、夫婦仲も良好らしい。

居間に入った二人は縁側に近い窓側の方を背に座り込んだ。

「いただきます」

そう言つて三人は黙々と朝食を食べだした。

「あなた、今日は道場の方はお休みでしたわね」和江が話を切り出した。

「ああ、そうだが…どうかしたか？」

「この前に、休みの日に蔵の掃除をしてくださるって約束したですよ」

「あ、そういえばそんな約束をしたなあ。よし、あとでやるとしよう。次郎、手伝えよ。」

「悪いが作家はペンより重いものは持てないんだ」

そう言つて次郎は和江に空の茶碗を差し出した。

「よく言つよ、ペンより重い八ミリカメラを回しているくせに」

「むむっ…！」

反論の種が尽きたのか、次郎は黙ってしまった。

「よし、決定だな！」

一郎にポンと肩を叩かれ、次郎は力なくうなだれた。

「おい、その箱はこっちに頼む」

「はいはい、わかったよ」十分後、庭の隅にある小さな蔵の前を次郎は行ったり来たりしていた。

蔵の中はしばらく掃除していなかったので埃まみれであつた。「ゲホゲホッ、ひどい埃だ。よくもまあ今の今まで俺達肺ガンにならなかったもんだナ」

一郎はハタキを片手に、もう片方の手には懐中電灯を持ちながら荷物についた埃を落としていた。

「兄貴、この蔵には何があるんだ？」

「さあな、多分壺とか掛け軸みたいな骨董品はないだろうな。先祖代々無趣味で通っている鑓一族だもの、まあ、昔の生活用品とか親父がとりためた写真やカメラ・8ミリ映画があるのは確かだろうな」

そう言つて一郎は次郎に金属製の丸い缶を渡した。

「ほれ、早速出てきたぜ。お前が初めて作った映画のフィルム」

「あー、なくしたと思つていたらここにあつたか…」そう言つて次郎は足元や棚を探りだした。

「どうした？」一郎が聞く。「ひよつとしたら親父の買ったブルーフィルムがあるかも…」

「ハハハ、まさか…」

（ブルーフィルムとは、お下品なフィルムの事を言う死語である）と、次郎は棚の奥に柔らかいものを見つけた。

「ん？なんかあるぞ」

「なんだ、0点のテストか？」

「の 太か！」

そうこつ言つているうちに、「何か」の正体が判明した。それは和本、即ち昔の本であつた。厚さは二センチほどある。

「何の本だ？」

「いや、こいつは本じゃないよ兄貴。家計簿かなんかだろう。」

そう言つて次郎は本の表紙についている埃を払つた。と、二人の眼に信じられない物が飛び込んで来た。

備忘録 虚刀流七代目・鑢七花

「な、七代目！？という事は尾張時代の物か！」

一郎はハタキを落としたのに気付かない位驚愕した。尾張時代と言えば、江戸時代の前に百年ばかり続いた時代である。トータルすれば五百年も前の物だ。

「さて、何がかいてあるのか…」

次郎は表紙を開いて中を読み出した。「お前、読めるのか…？」

「兄貴、小説家をなめて貰つては困るな。これくらい読めるよ」

しばらく備忘録を眺めていた次郎は本を閉じてこつ言つた。

「なんて事のないただの日記らしいな。」

「なあんだ。」

そう言つて一郎はそのまま掃除を再開した。

「兄貴、俺ちよつとこの本を書斎においてくるよ」

「なんだ、お前ただの日記つて言つていただらう？なんか気になるのか？」

一郎は埃よけのマスク越しに次郎に言つた。

「いや、日記という点ではつまらんが、当時の文化を知るには面白そうな物だ。後でゆっくり読むとするよ。」

そう言つて次郎は蔵を後にした。

書斎についた次郎は本を置いて戻ろうともせず、ただただ備忘録を眺めていた。（兄貴には悪いが、こんな面白いもの他人に見せられますかつての！）そう思いながらニタニタする次郎は端から見ると変態にしか見えない。

「さてさて、さっきのページはどこだったかな？」

パラパラめくつていくと、次郎はお目当てのページにたどり着いた。

「何々、絶刀・鉋……？」

妙な名の刀だな、と思いつつ、次郎は読み進んだ。

かれこれ二時間は経つただろうが、さっきまで明かった外に黒雲が現れた。かと思うと、ドバツと降りだしたではないか。普通なら気付くだろうが、無我夢中の次郎はまるで気付かない。

と、次郎の書斎へ近付く足音二つ。

「全く、次郎と来たら、すっかり忘れているんだから困つたものだ！」

「まあまあ、そう起こらず。先生なんかまだ軽い方ですよ。」

話から察するに一郎と編集者らしい。編集者曰く、中には締め切りをほつたらかしにして海外に逃亡した作家もいるらしい。

「なるほどねえ、その話を聞くと次郎はまだましなほうだ」

「そうでしょう？締め切りはまあしっかり守る方だし、先生は普通の方ですよ」そう言つて二人は障子の前に立った。

「鑓先生、小説サロンの内山です。打ち合わせの方を始めましょう

！」

だが、返事は帰って来ない。

「次郎め、どうせ高いびきをかいているんだ！」

一郎は我慢ならず障子を開け放った。

ガラン、と音をたてて障子が開いた。

「次郎ッ……？」

一郎がそこで話すのを止めたのには訳があった。

何故なら、そこには高いびきの次郎ではなく、まるで何かに取りつかれたかのように原稿用紙に向かう次郎が居たからだ。

「……あ、兄貴。それに内山さんも。」

何事も無かったかの様に振る舞う次郎に二人は驚いた。

「じ、次郎。さっきは返事がなかったが一体何をしてたんだ？」

「ああ、新しい小説の草稿作ってたんだよ」

そう言つて次郎は内山に分厚い原稿用紙の束を渡した。

「「十二神剣かく闘えり」ですか……」

「時代小説なんだよ。まあ、ここではなんだ、どこかで腰を据えて……？」

次郎が話すのを止めたのには訳があった。それは、編集者の内山が原稿用紙に釘付けになつていたからだ。「あの……内山さん？」

次郎に声をかけられて、内山は我に帰った。

「……あつ、すみません。面白くて我を忘れてました」「そう？あんまり自信はなかったんだけど……」

次郎は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「先生、さつそくですが……」「何？」

「この原稿を編集会議に提出させて貰つてもいいですか？」

「え！」

次郎はあまりの事に驚いた。基本的に草稿が会議に出されることはない。

（待てよ、内山さんは見る眼が人一倍あると編集長が言っていたナ……。となれば、これは期待できるのか？）そんな事を考えながら、

次郎はニタニタしていた。

「先生…先生？」

「！」

「どうしたんですか、ニタニタ笑って。」

「い、いや、別に何も…」

まさかそんな事を考えていたなんて口が裂けても言えない。

「それじゃ、草稿お借りしますね。」

そう言って内山は鑓家を出ていった。

「さて、どうなる事やら…」次郎は煙草に火を点けて、ユラユラ揺れる煙越しに内山の背中を見つめていたのだった。

第三話・新しい小説（後書き）

次郎がかいた小説「十二神剣かく闘えり」は、原作と同じ様な話と
考えてください。

さて、物語はいよいよ序章を離れ本編へ…。気になる話の続きでござ
いますが、本日これまでまた次回…。（NHKでかつてやってい
たある番組のナレーションがモトネタです。興味のある人は調べて
みて下さいね）

第四話 不思議な荷物と探偵助手（前書き）

お久しぶりです。さて、今回次郎達に進展が、そしてあの人が登場します。

第四話 不思議な荷物と探偵助手

あれから三ヶ月が経ち、初夏を迎えた。「十二神剣かく闘えり」は小説サロンに連載されることになり、次郎はまた忙しい日々を送っていた。

「おい、次郎。また読者からのファンレターだぜ」そう言つて一郎は山のように積まれた手紙の束を次郎に渡した。

「ウヒヤー、ずいぶんとあるな。あれ、下の固い箱はなんだ？」

「ハムだよ。今晚のおかずに和江が使いたいと言つてるんだが、良いか？」

「そんな事言つて、ホントは兄貴が喰いたいただけだろう」

「ハハハ、バレたか」

二人が笑っている所へ和江がやつて来た。

「あなた、お中元に頂いた包みがあるんですけど重くて持てないから運んでくれませんか？」

見るとよほど重かつたのだろう、和江の手には紐のあとがついていた。

「そんなに重い物を送ってくるなんて、一体どこの誰だろう？」

「それが、どうも次郎さんのファンの方らしいのよ。だって、聞いたことのない住所ですもの」

それを聞いた一郎はジト目で次郎を見た。

「な、なんだよ兄貴」

「お前のお中元なんだからお前が運ぶべきだろう」

「はあ…」

そう言つて次郎は渋々荷物を取りに行つた。

玄関に着くと、和江が格闘したであろう荷物があつた。ミカンの入った段ボール箱ぐらいの大きさで、あまり重そうには見えない。

「はてさて、何が入っているのやら？」

そう呟いて、次郎は箱を開けた。

「なんだ、こいつか」

それは次郎が修理に出していた8ミリカメラ達だった。

8ミリカメラというのは、8ミリ幅のフィルムを使うムービーカメラの事で、次郎はその愛好家だったのだ。一台辺りの重さはさほどでもないが、十台もあれば重くもなるはずである。

「悪いことしちゃったな…。義姉さんに謝らなくちゃ」と、次郎はあることに気づいた。

「なんで知らない住所から来るんだ？」

それもそのはず、次郎は修理工場に送ったのだ。それなら知っている住所のはずである。

「一体誰が…？」

次郎は宛名を確かめた。

宛名には「東京都有楽町三の三 習志野権兵衛」とあった。

「習志野権兵衛…。何者だ？」

しかし、次郎に知る術はなかった。

「鑓先生！早く書いて下さい！」

「うわっ、見つかった！」

これだけ見ると編集者の様に感じるが、違う。

「花房くん、まだまだ×切まではあるんだよ。」

「鑓先生、早く書かないと僕が困ります。気になって稽古が出来ません！」

花房？と思う人もいるであろう。実は花房というのは一郎の門下生の少年なのだ。一郎の固い性格が伝染病の如く伝播した、ある意味での被害者だ。

「そんな事言われても…」次郎は頭を抱えた。
と、その時。

「コラッ、花房！」

「ウヒヤッ、先生！」

そこに現れたのは一郎だった。

「お前は毎度毎度同じことを何べん言われたら気が済むんだ！」

そう言つて一郎は花房の胴着の襟を掴んだ。

「次郎の邪魔をするな！さつさと道場で稽古してこい！」

「ウヒャー!!!」

花房は断末魔を残して投げ飛ばされた。

バコン、と大きな音がして当たりに沈黙が訪れた。

「すまん、次郎」

「いや、別に良いよ。あそこまで熱心なファンは初めてだよ。いろんな意味でありがたい存在だ」

そう言つて次郎は例のカメラを持って書斎へと戻った。

今の騒ぎで次郎は宛先の事などすっかり忘れていた。いや、仮に覚えていたとしても、楽天的な性格の彼はたいして気にもしなかっただろう。とにかく、些細な事であつたのだ。

さて、場所は変わつてここは東京・日本橋。大通りから一步下がつた裏路地に、小さな探偵事務所があつた。

外にある「知平探偵事務所」と書かれた看板は手作りなのか、字が曲がっている。と、中から電話のベルがなつた。

「こちら知平探偵事務所です…はい、お約束通り調査は終了致しました。それでは、後日調査報告書をお渡しいたします。では…。」
そう言つて電話に出た人物こと、私立探偵・知平姫代は受話器を下ろした。

「先生、前谷さんの浮気調査がやつと終わりましたね」

そう言つて姫代にお茶を出したのは、彼女の優秀な助手・間宮精一少年である。「精一君、ありがとね。ちようどお茶が飲みたかつたのよ」

余程のどが乾いていたのか、姫代はカップに入つた紅茶を飲み干してしまった。「夏の暑い盛には熱い物が一番体にいいのよ」

「なるほど、だから先生はお美しいのか」

「ウフフ、精一君。誉めても何も出ないわよ」

「いやいや、そんなつもりは…」

と、玄関のベルが鳴った。「あつ、誰か来たみたいですね」

「多分、買い物に行つてた左右田よ。精一君、開けて頂戴」

「はい」

ドアを開けると、そこには山のような荷物を抱えたやや長めの髪
の青年がいた。「やあ、精一君。こいつをキッチンまで運んでくれ」
余程重かったのか、左右田はぐっしりと汗をかいていた。

「お帰り」

姫代は左右田に団扇を渡した。

「はい、ただいま帰りました…」ソファに座った左右田は開襟シ
ヤツのボタンを二つばかり外して、団扇で涼みだした。

「左右田さん、おしぼりで汗を吹くと気持ち良いですよ」

「おつ、ありがとう」

精一は汗だくの左右田にキンキンに冷えたおしぼりを渡した。

「おお、こいつぁ良いや」

よほど涼しいのか、左右田はシャツを脱いで胸元をふきだした。

「左右田、レディーの前で裸になるなんて下品ね」

姫代は冷やかな眼で左右田を見た。

「ハハハ、すいません先生」

「先生、いいじゃないですか少しくらい。この暑い中左右田さんは
買い物に行つて下さったんですよ。涼んだっていいでしょう」精一
は左右田を弁護した

「そうねえ、じゃあ精一君に免じて許してあげるわ」

そう言つて姫代は団扇で左右田を扇ぎ出した

「あの…」

「精一君、どうかしたのかい？」

「先生、僕そろそろ帰らないといけないので今日は失礼します」

「あら、もうそんな時間なのね。それじゃ、気を付けてね…」

左右田と姫代に一別し、精一少年は自宅へと帰った。さて、当然の
事ながら事務所には左右田助手と知平探偵が残った。

「さて、精一君も帰ったことだし…」

そうつぶやいて左右田はポケットから煙草の箱を取り出した。おそろくさつき吸わなかったのは精一がいたからだろう。

「肺がんになりたくはないわ。窓の外で吸って」

「はいはい…」左右田は窓の外へ身を乗り出し煙草に火を点けた。

「しかし、あんたに会った時は驚いたわ…まさかあの左右田右衛門左衛門その者だとはね…」

そう言って姫代は左右田の後ろに立った。

「不言（言わず）…。私も同じ心境。まさか輪廻転生が真にあるとは夢にも思わなかった…」

「そして、かつての主君・否定姫の子孫に出くわすなんて、うまく出来すぎてると思わない？」

姫代は悪戯っぽく微笑んだ。

「それは…」

「いいわよ、無理しなくても」

「むむ…」

聞かれたのか、それとただ単にからかっただけなのか。左右田には姫代の考えがまるでわからなかった。「しかし、姫様によく似ていらっしやる…」

左右田は後ろにいた姫代の顔を眺めて言った。

「そう？私はご先祖様の事はよく判らないけど、まあ、血が流れているなら当たり前よ」

確かに、姫代の顔は否定姫に似ている。髪と眼の色こそ違えど、あの挑戦的な顔立ちこそつくりだ。

「ねえ、左右田」

「なんです、姫さ…。いや、先生」

「あんたの好きな呼び方で良くなくもないわよ」

（この口癖…やはり血筋か）そう思い、左右田は煙草を灰皿の中に突っ込んだ。

「にしても、明日からの生活、どうしましょ…」

姫代は深いため息をついた。まあ、こんな路地裏で儲かるはずもありませんまい。「姫様、ここは1つ格安調査をやってみてはどうでしょう」

「あんだ、死にたいの？」

「いやいや、そうではありません。」

「じゃあ何よ」

姫代はムスツとした顔を左右田に向けた。

「一度格安調査を行って、顧客を作り出すですよ。だいたい、探偵稼業は浮気調査がメインでしょう？井戸端会議で話になればしめたもんです」

「ああ、なるほど。それは名案ね」

「それではさっそく印刷所にチラシを頼みましょうか。えーと、印刷印刷……」

そう言って左右田はパラパラと電話帳をめくりだした。

（全く、頭がよく回るわね。ご先祖様が重宝してたわけがわかるわ）
初夏のある日の事であった。

第四話 不思議な荷物と探偵助手（後書き）

出たのは左右田右衛門左衛門でした。

さて、こちら辺で登場人物紹介をしたいと思います。（いささか遅すぎた気がしなくてもいい…）

鑓一郎（26）

虚刀流第21代当主。次郎の兄。

鑓次郎（25）

小説家。趣味は煙草と八ミリ映画。

鑓和江（26）

一郎の妻。

知平ともひら姫代（？）

否定姫の子孫で私立探偵。性格は否定姫その物。

左右田和彦（肉体は20の青年）

表向きは姫代の助手だが、その実態はご存じ左右田右衛門左衛門。（ちなみに和彦という名は姫代が付けた）

第五話・怪しき依頼人（前書き）

ついに今年も残す所二時間弱。

皆さんはどんな一年を過ごしたでしょうか？

さて、今年最後の平成刀語、どうぞご期待下さいませ…。

第五話・怪しき依頼人

「な、なにこれーッ!?」悲鳴に近い絶叫が知平探偵事務所に響いたのは、左右田がチラシを発注してから1週間ばかり経ったある日の事だった。

「せ、先生、一体なんの騒ぎです」

「あ、精一君…。ひ、一けた少ない…」

そう言って姫代は精一にチラシを見せた。

浮気調査・失踪者搜索

知平探偵事務所

調査費・30000円

「え?さ、三万円から?」

「違うの、正しくは三十万円からよ…」

さて、姫代の落胆ぶりを皆様に知っていたくには一般的な浮気調査の依頼料について説明しなければなるまい。一般的に、浮気調査の依頼料は基本料が50〜60万円。それに調査の方法によって10万円ずつ加算されてゆくのが普通だ。左右田はそれを二十万円安くして、客を呼び込もうとしたのだ。

しかしなんという運命のイタズラか。

一けた少なく表示されたチラシは恐らく、大量の顧客を生む代わりに姫代を過労で倒れさせてしまうであろう。

「うわわ!僕の小遣い稼ぎが…(半泣き)」

精一は顔を真っ青にして姫代を見つめた。

「あ、私を見ないでよ!恨むなら…恨むなら左右田を恨んで!」

「なっ!?!」

いきなりの事に、左右田は手に持っていたコーヒークップを落としてしまった。「不恨!先生、正気ですか!」

「私はいつも正気よ！だいたい、依頼用の原稿を書いたのはあんたでしょう」

「そ、それは……」

「あ・ん・た・が悪い！」

姫代に一方的に攻められて、左右田はかなり落ち込んでいる。

（ええい、姫様の子孫とは言え、こればかりは……理不尽！）

「先生ッ！お言葉ですがねエ、私が頼んだ原稿にはちゃんと三十万円と書いてありました！」

「うるさいわね！男だったら潔く非を認めなさい、この責任逃れ！」

「不認（認めず）！そうやっていつもあんたは人をこき使って……」

どこへ行ったか忠誠心、左右田は自分の立場を忘れ姫代とギヤアギヤア口喧嘩。と、その争いを停めるように呼び鈴がなった。

「……？」

「左右田さん、先生、ここは一時停戦という事でどうですか……？」

「……………」

黙りこんだ二人は顔を見合わせてため息をついた。

「左右田、ここは1つ、停戦という事で良くなるもないわよ」

「わかりました」

それを聞いた精一は安堵の表情を浮かべ、さっそく玄関へと向かった。

「はい、ただいま……」

そう言つて精一はドアを開けた。

そこには、銀行員の様なスーツに身を包んだ背の高い女性が立っていた。

「あの、知平探偵はいらっしゃいますか？」

「え、あ、はい！居りますが……」

「大至急の用件なんです。早く会わせて下さい！」

「はい！」

精一は彼女を奥へと通した。

「なるほど、それで、船越さんとは二ヶ月連絡が付かないと……」 姫代は依頼人に問いかけた。

「はい。彼のいる会社でも、まるで見当が付かないそうなんです……」 依頼人の女性は泣き顔になった。

さて、ここまで至った経緯を説明しよう。

依頼人・山根一美は2ヶ月前から連絡が付かない恋人の船越六郎を探し出すべく、姫代のもとを訪れたのだ。

「お心当たりの場所は他にありませんか？」

「いいえ、思い当たる場所は全てあたりました。」
「なるほど……」

姫代はしばらく考え込んだ後に、こう言い放った。

「わかりました、お引き受けしましょう」
「本当ですか!？」

山根は嬉しそうに叫んだ。その顔には幸せな表情が浮かんでいた。

「ただ、かなりの時間とお金がかかると思います。それでも構いませんか？」

姫代の問いに山根はしばらく考え込んでいたが、すぐに

「構いません、彼が見つかるならいくらでも構いませんわ」と、承諾した。

「わかりました。それでは、我が知平探偵事務所の面子にかけて船越さんをお探しいたします!」

その発言に感激したのか、山根は嬉し涙を浮かべていた。

山根が帰った後で、三人はテーブルを囲んで相談をしていた。

「にしても、あの人がチラシを見ていなかったのが幸いでしたね」

そう言つて精一は左右田に冷えたレモンティーを渡した。

「ハハハ、全くだね。あのチラシを見られていたらどうなっていた事か……」

左右田は笑いながらレモンティーを口に運んだ。

「二人とも、早く始めたいんだけど……」

姫代は空になったグラスを指先でつつきながら二人を睨んだ。

「あ、すいません…」

「別に良いわよ。それじゃあ、明日の役割を分担するわね。まず左右田は彼の住んでいた千代田のアパート付近をあたって頂戴。」

「心得た」

「そして、精一君は私と一緒に彼の出身地・千葉へ行ってみましょう」

「わかりました。それより左右田さん、なんで忍者みたいな言い方を？」

「！」

「いや、別に意味は…」

「つい地が出たのか、左右田は慌てている。」

「ふーん、まあ良いや。」

「さ、明日は早いわ。探偵事務所、今日はこれにて閉店！」

「それじゃ、失礼します」

そう言つて、精一は探偵事務所をあとにした。

その直後、左右田に悲劇が降りかった。

「この馬鹿！」

「いてっ！」

姫代にすねを蹴飛ばされ、左右田は苦悶の表情を浮かべた。

「あんた、元忍者のくせに随分無用心ねえ。」

「イテテ、つい癖で…」

「ま、しょうがないわ。許してあげるわ」

「は、有り難きお言葉…」

ダメだこりゃ。と思いつつ、姫代はソファーに横になった。

「しかし、ひどい人ねえ船越さんって…」

「？」

「考えても見なさいよ、好きな人にいきなり姿隠されて、心配しない恋人がどこにいるのよ」

「それもそうですな…」

そう呟いて、左右田は窓を開け、煙草に火を点けた。辺りは会社帰

りのサラリーマンや帰宅途中の学生で一杯だ。
「？」

左右田の眼にある顔が飛び込んできた。

（あれは、山根さん…？）

見ると、ビルの間で誰かと話している。

（おかしいな、だいぶ前に帰ったはずなのに…）

「左右田、どうしたの？」

「いや、なんでもありません」

「ふーん、ならいいけど随分考え込んでたみたいだし…」

姫代の話の矛先はそこで折れてしまった。

（考えすぎだろうか…。）

心にわだかまりを残したまま、左右田は窓を閉めた。

「さーて、明日はどのハンティングにしようかしら」

姫代は衣装ダンスの中からハンティングを取り出し、あれやこれやと選んでいる。

「その市松柄のはどうです？」

「えー、ダサいわよ…」

「いいじゃありませんか、大人っぽくて」

「私は大人だ！」

左右田の心無い発言に、姫代は怒り心頭である。

「ったく、アンタファッションセンスはまるでダメねえ」

「仕方ないでしょう、今の人間じゃないんですから」

そんなやり取りの後、結局姫代は市松柄のハンティングにしたのだった。

さて、所変わって都内某所のある旅館。

団体客用の部屋に大勢の人が集まっていた。

服装は様々で、学生服にカジュアルファッション、はては和服にリ

クルート。

この関係性のまるでわからぬ集団は何者であろうか？

さて、読者の皆様。

何やら怪しき展開の黒雲が出て参りました。

気になる続きでございますが、本日これまでまた明日…。

第五話・怪しき依頼人（後書き）

次回、再び次郎サイドでついに一大事が…！？
2012年もどうぞよろしくお願いいたします！
青い三角定規でした…。

第六話・姿無き魔人（前書き）

あけましておめでとうございます！

ついに来ました2012年。

今年もユウ1探偵長・平成刀語をよろしく願っています。
さて、予告通り、次郎の身に一大事が…！

第六話・姿無き魔人

それは、ある暑い晩の事であった。

鑓家では、次郎達が縁側でスイカを食べていた。

「兄貴、塩いる？」

「いらん。」

「えー、旨いぜ。スイカには塩が一番だと思うがなあ…」

「塩分の摂りすぎは体に毒だぞ。特にお前みたいな日頃運動しない奴はな…」

ああ、また始まった。

そう思いながら、次郎は兄をよそに塩ふりスイカを食べだした。

「まあまあ、あなたも次郎さんも、そんなに力ツカしないで下さいな」

和江が台所からスイカの入った皿を持って来た。

「待ってました！」

「好きだな、お前…」

一郎は次郎のとめどない食欲に呆れていた。

「うーん、うまい！」

「次郎さんの食べっぷりは見ていて気持ちがいいですわ。」

「和江！次郎が調子に乗るからやめてくれ」

「あら、本当の事でしょう」

「ムム…！」

かける文句が尽きたのか、それっきり一郎は黙ってしまった。と、玄関の呼び鈴が鳴った。

「すいませーん、電報です」

郵便局員らしい。

「はい、ただいま…」

そう言って和江は玄関へと駆け出した。

「今時珍しいな、電報なんて…」

「確かに。次郎、お前送り主に心あたりはないのか？」

「そう言う兄貴こそ、誰か心あたりがないのかよ」

「それが、てんでない…」

「ありやいや」

二人の奇妙なやり取りはそこで止まってしまった。

「次郎さん、あなた宛の電報ですよ」

「おれ宛？」

はて、誰だろうと思いつつ次郎は封を切った。

「あっ！？」

「どうした次郎！？」

次郎が驚いたのも無理は無い。

「これ、弔電じゃないか！」

確かに、送られてきた電報は白黒の模様入りである。そして、中にはさらに恐ろしい事がしたためてあったのだ。

鑓次郎氏へ

警告

今すぐに「十二神剣かく闘えり」の連載を中止せよ。さもなければ貴様には死という名の使いが訪れるだろう。大人しく手を引け。

姿無き魔人より

「じ、次郎！」

「…イタズラにしては随分手が込んでるな…」

冷静な態度に見えるが、次郎の心中は穏やかではなかった。

「次郎、差出人の名は無いのか？」

一郎の問いに、次郎は首を横に振った。

「しかし、奇妙な脅迫だな…」

「？」

次郎の呟きに一郎は首を傾げた。

「随分と具体的な内容じゃないか、この文面」

確かに、よくある支離滅裂な文面とはまるで違う。

「小説を読んで、面白くないと思った読者ならこんな書き方にはならないよ。もっと興奮した、落着きのない文面になるはずだ」

「と、いうことはどういう事なんですか？」

和江が問いかけた。

「こいつは計画的な思考の上で書かれたものらしいですね」

「な！？」

予想外の答えに一郎は驚きを隠せなかった。

「だけど、１つ気になる事があるんだ」

「なんだ？」

「どうやって、どうやって犯人は不審がられずに電報を発注したのかという所だよ。」

「確かに……」

一般的に、電報は電話申し込みで文面を作り、そこから発送する。電話口に出れば自分の住所や素性はいやでもバレてしまう。

「おい次郎、ここは警察に知らせた方がいいんじゃないか？」

「ああ、そうしよう」

次郎の返事を聞き、一郎はすぐさま最寄りの交番へ電話を入れた。

「……なるほど。この電報が……」

一郎の知らせを受け、警察が来たのは２０分ほど経ってからの事だった。

「それでは、郵便局に訪ねてみましょう」

やって来た初老の警官は、携帯を取り出し郵便局に電話をした。

「……はい、そうですか……」

何！？」突然の事に次郎たちは驚いたの。

「はい、はい…わかりました、ではこれで…」

警官は電話を切った。

「どうかしましたか？」

「それが、郵便局では配達した者がいないと言っているのです」

「なっ！？」

「そんなバカな！」

では、さっき配達に来たのは誰なのだろうか？

「ただ、1つ気になることがありますね」

「なんです？」

一郎が身を乗り出して聞いた。

「三日前に弔電用の紙が一枚紛失しているそうなのですよ」

「まさかお巡りさん、犯人が郵便局に忍び込んで弔電用紙を盗み作成し、次郎に送りつけたとでも？」

「まさか、とは思いますが…」

そう言つて警官は黙り込んでしまった。

その日の取り調べはそこで終わり、後日また行ふことになった。

その晩、次郎はふとんの中であることを考えていた。

「姿無き魔人か…。一体何の目的で俺を狙うんだろうか？」

だが、それに答える者は誰もいない。

いくら考えてもわからない。

次郎はそのまま深い眠りに落ちてしまったのだった。

第六話・姿無き魔人（後書き）

さて、皆さん。

突然ですが、皆さんは犯人は誰だと思えますか？

郵便局に忍び込んでもバレず、配達してもバレない人物…。

お心当たりがありませんか？

わかった方、わかってもまだ言っではいけませんよ…。

それでは皆さん、本日これまでまた次回…。

第七話・国際諜報団（前書き）

お久しぶりです。

今回、変な奴が二組出ます。

どちらかは初見、どちらかは皆様よくご存じの人々ですよ…。

第七話・国際諜報団

さて、日付変わって翌日。

いつもより早く眼の覚めた次郎は庭に出た。

「次郎、いつもより早いな」

見ると、一郎が竹刀を振っている。

「兄貴の竹刀を振る音で眼が覚めたんだよ」

どうも不本意な目覚めだったらしく、次郎はやたらと不機嫌である。

「フ、いつも不規則な生活をしているからだ。たまにやいいだろ」

そう言つて一郎は竹刀の矛先を次郎の鼻先に向けた。

「うわわわ…！」

「フン、これくらいで驚くな。軟弱者め」

一郎はようやく竹刀を下げた。

「兄貴、もう少し加減してくれよ。俺は根っからの文化系なんだよ」

確かに、次郎は性格・運動神経共に体育系ではない。

まあ、当たり前の結果とも言えよう。

「じゃあ、軽く走ってくるから、郵便受けの新聞を食卓に置いといてくれ」

そう言つて一郎は表へ飛び出していった。

「…行つてらっしゃーい」

次郎は一郎の体力に感心した。

否、呆れたというのが正しいだろう。

次郎は学生時代に校内マラソン大会でビリッけつを取った無体力の主である。

運動やる奴は気が知れん。

と、日頃から考えているくらいなのだから、まあ自然な流れだ。

ひとまず、次郎は郵便受けに向かった。

だが、この行為はさほど気になっていないらしい。

何故ならば、この所次郎の関心をひいているニュースの続報が気に

なっていたからだ。

「おっ、また出ているな」

次郎の見ている一面には、次のような見出しと記事が出ていた。

「国際諜報団・ついに日本上陸か？」

昨今世間の関心を呼んでいるスパイ組織・国際諜報団の一派が日本へ上陸したらしいと昨日午後11時、ICPO・国際刑事警察機構が発表した。

国際諜報団は冷戦下の1950年代に当時共産圏であったユーゴスラビアにて結社されたと言われ、主に西側国家の機密情報・軍事技術を収集し東側へ売り渡すなどのスパイ活動を行ってきたと見られるが、冷戦終結と共にその足取りが長らく不明のままであった。

しかし近年、各国での機密情報流出事件の多発からICPOが調査に乗り出した所、同組織がパリを拠点に活動を行っている事が判明した。

そして2002年、現地警察の突入作戦により組織幹部が芋づる式に検挙された。

しかし、それはあくまで冰山の一角に過ぎなかった。昨年、造船大手の内海造船所がサイバー攻撃を受けたのは記憶に新しいが、この事件に国際諜報団が関与しているとの見解を軍事研究家・松公寺平蔵博士が発表、国際的な関心を呼んだ。博士の運営する「松公寺軍事研究所」は3日午後声明を発表し、「国際諜報団が世界に与える影響は大きく、客観視は出来ない」

と、同組織の更なる暗躍に対する警鐘を鳴らしている。

これに対し政府は5日、緊急閣僚会議を行い、仲野首相は防衛省・箱根長官に国内全域への厳戒体制を敷く様に命じた。

なお、これに関連し、山藤悠一氏率いるさつき探偵社は同日警察庁との特別捜査協定を締結。国際諜報団対策に希望の光が射している。

「へー、あの山藤探偵がね…。流石」

「流石、ユウ1探偵長の通り名で世間に知れてるだけはあるな」

「！」

振り返ると、胴着姿の一郎が牛乳瓶片手に突立っていた。

「兄貴。帰っていたのか」

「ああ。あまりにもお前が熱心だから声が掛けづらくてな」

「はあ…」

本人はあまり自覚がないらしく、次郎は曖昧な返事をした。

「ほれ、次郎。牛乳瓶を運んでくれ」

一郎は次郎に四本の牛乳瓶を持たせた。

「わわわ、いきなり何すんの…」

「これくらい家族なら当たり前だろうが。サッサと運べ！」

一郎にドヤされ、次郎は一目散に家の中へと入って行った。

「ふう、兄貴め…段々波 みたいになってきたな」

「誰が 平だ！」

「うわーっ！」

愉快的朝の一コマであった。

「何が愉快的もんか！」

あらら、当人は満更でもないらしい。

さて、鑓家で二人がいがみ合いを繰り広げていた頃、都内である動きがあった。

前々回、終わり際に触れた旅館をご記憶だろうか。

そこでは様々な格好の連中がざつと十二人、寝食を共にしていた。

だが、今日は何やら様子が違う。

朝の早くから、皆は何かを待っている様だ。

「遅いな…。朝の8時と約束したのに…」

そう言つて先程から時計とにらめっこをしているのはスーツ姿の若い男である。

「まあまあ、そう焦らずに。じきにつくじやろ」

そう言つて彼を落ち着かせるのは、まるで小林一茶の様な格好の老人ではなく、ブレザー姿の学生だった。容貌としゃべり方がまるで合わない。

「でも、何もこんな朝早くにしなくても…」

そう言いかけてためらつたのはセーラー服の女子学生である。

「善は急げ、だ。いずれにしても必要な物だ、別に差し支えはあるまい」

「はあ…」

と、そこへ足音が近付いて来た。

「！」

何故か皆は身構えた。

「失礼いたします。」

「はい」

セーラー服の女子学生が応答した。

「仲居さんみたいね」

「うむ。」

小声でスーツの男に呟くと、彼女は襖に手をかけた。

「あつ、どうもすみません。」

「いいえ。それより、何か御用ですか？」

女子学生の問いかけに、仲居はこう答えた。

「ええ、こちらのお部屋の田中さんにお届けものです」

「！」

スーツ姿の男・田中は仲居の言葉に反応した。

「お代は頂いているので早くお渡ししてくれと言われていまして…」

「わかりました。」

そう言い、田中は部屋を出た。

「ねえ、大丈夫かな？」

隅っこにいた長袖・短パンの男児がブレザー姿の学生に尋ねた。

「何がだ？」

「だ、だって、里の人間に作ってもらったわけじゃないし…」

「案ずるな、近頃はコスプレ用に色々と作れるそうじゃからな。相手がそう思っすりゃ簡単にやバレんよ」

「はあ…」

そう言って男児は黙ってしまった。

「おーい、届いたぞ」

田中が帰ってきた。

「これで俺達十二人も、やっと復活という訳だ」

田中の持つてきたのは、かなり大きい紙包みである。紐をほどくと、中からは妙な服が出てきた。

まず始めに出てきたのは、まるでペンギンのような小さい服だ。

「久しぶりだなあ」

そう言って服を手にしたのは先程の男児だ。

「お次はお前だ。」田中はブレザー姿の学生に、何やら亀のような服を渡した。

「…よく出来てるわい」

これをあと九回繰り返し返して、服は全員に行き渡った。

「さて、」

田中は部屋を見渡し言った。

先程の衣装を着たので、皆は何やら派手な格好になっている。

犬みたいなのも居れば、蜜蜂みたいなのもいる。

「ついに、これで我らも元通りになった訳だが…」

田中は鳥のような格好である。

こんな格好で真面目な話を聞けと言われたら、常人はまず無理だろう。

だが、彼らには気にもならないらしい。むしろ、それが真の姿でもあるかのようだ。

「なんだか、気乗りがせんな…」

「随分と弱気ですねえ、大丈夫ですかあ？」

ペンギンの様な格好の男児が田中に問いかけた。

「フ、気にするな。ちよつとした独り言さ」

「はあ…」

「まあ、無理もないな。自分達と同じ名前の敵なんだから…」

そう呟いて、亀のような格好の学生は窓の外を見ている。

「ふふふ、ご名答。」

そう言つて、田中は悪戯っぽく笑つたのだつた。

さて、皆様。

国際諜報団なる怪しい奴らが、この日本を、はては世界を狙っているのでございます。

その危機が、果たして次郎達、そしてユウ1探偵長らにどうか関わるのか。

そして、この十二人の怪しき連中の正体は…？

気になる話の続きでございますが、本日これまでまた次回…。

第七話・国際諜報団（後書き）

次回、あの人が出てきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1183z/>

ユウ1 探偵長事件簿～ファイル001・平成刀語～

2012年1月5日22時51分発行